

学会参加報告

日本小児保健学会に参加して

今帰仁村役場

保健師 運 天 琴 美

今回、初めて学会に参加することになりましたが、毎日の業務が忙しく、いまいち実感の湧かぬまま、いつのまにか新潟に到着してしまった、というのが正直なところでした。参加者は医師も保健師も中南部の方ばかりで、ほとんどが初対面だったので、少し緊張もありました。しかし他の参加者同士が顔見知りで、和やかな雰囲気だったので、私も次第に緊張がとれ、リラックスして過ごすことができました。

初めての学会は、事前にプログラムを見ていたのど何となく「こんな感じかな」というイメージはあったのですが、やはり最初は戸惑いがあり、何が何だか分からないまま、最初のシンポジウムが始まっていました。

三日間にわたる様々なシンポジウム、講演のうち、私が聞くことができたのはほんの僅かでした。どれもこれもあっという間に終わり、とても慌しかったです。今回は、妊娠期から保育現場、学校保健、小児科医、NPO法人など、普段はなかなか聞くことの出来ない様々な立場からの様々な意見や現状を聞くことができ、とてもいい経験になりました。「これはうちの村でもすぐに取り組みたい！」ということから「現段階では手をつけることが難しいが、今後見ていかななくてはいけないことだな」ということまで、本当に幅広く、見聞を広める機会となりました。

特に印象に残っているのは、宮本信也先生のランチオンセミナー「発達障害の理解と対応～小児保健の視点から～」です。健診の場で出会う“発達障害の疑いがあるが、親が気にしていないケース”“精密検査が出ているが、拒否して受けようとしめないケース”など関わりにくいケースへの対応の仕方につい

て、大きなヒントを見せてもらったような気がします。ぜひもう一度、宮本先生の講演を聞いてみたい、と思いました。

今回の学会で、もう一つ大きな収穫となったのは、普段なかなか話す機会のない中南部地区（他医療圏）の小児科の先生方や先輩保健師の方と話す機会を持てたことです。とくに、小児科医の先生方と話す機会はそう多くはないので、小児科医の立場から保健師に望むことや今後の母子保健活動の見通しなど、考えさせられるいいお話が聞け、とても良かったです。先生方を身近に感じることができましたし、今後も話せる機会があるとなお良いと思いました。

日頃の業務の中では、最近は母子保健ももちろんですが成人・特定保健指導の比重が大きくなってきています。そうした中で母子と成人の両方を見ていくうち、将来の生活習慣病予防のためにはやはり、妊娠期・乳幼児期からの生活習慣病対策が大切だということを痛感するようになりました。母子保健だけを見ていては、気づけなかった視点だと思いません。いま、発達障害や虐待に関しては、まだまだ課題はあるものの、少しずつ保育現場や医療、療育機関と連携しながらのフォロー体制が進んできているように思います。一方で生活習慣病に関しては、まだまだ小児科医と内科医、保健師など、バラバラで動いている状況のように思います。とくに沖縄は生活習慣からくる肥満や糖尿病が多い状況であり、母子保健の立場からも将来の生活習慣病予防の視点を持って母子を支援していくことが必要だと思いません。今後、そうした母子保健と生活習慣病に関する研修があればぜひ参加したいと思いました。

学会参加報告

第57回日本小児保健学会へ参加して

うるま市役所 健康支援課
保健師 幸 良 理 沙

行政の保健師として4年目となるが、今回初めてこのような大きな学会へ参加することができ、たくさんの学びがあったことをとても幸せだと思いました。

私の所属する市は人口約11万人、出生数は年間約1,200人となっております。すべての人が安心して健全な環境のもとで出産、育児ができることが最も望ましいのは言うまでもありません。しかし若年妊娠、妊娠期のトラブル（妊娠高血圧症や切迫早産・流産）、低出生体重児など何らかのリスクを抱えるケースも少なくありません。無事に出産しても育児不安、虐待、両親の離婚など子どもが育つ環境が整っているとは言い難い状況も多く見受けられます。育児環境や出生時に何の問題もなかったが、発育・発達の過程で異常が見つかりそこから親子関係・家族関係がぎくしゃくしてしまうケースもあります。

今回の学会では改めて保健師の専門性を再確認できたと思います。私たちは日々子育て支援を展開し、個々に向き合い、子どもたちが安全で安心して成長するにはどうしたらよいかを常に考えて活動しています。その姿勢は子どもに関わる全ての職種で共通していることではありますが『地域（生活の場）』で『住民（親・保護者）と共に』子どもたちの成長を見ることができるのは保健師のとても大切な立場であると感じました。講演では医師や看護師、大学教授、NOP法人代表などさまざまな職種の方の取り組みを聞く事ができました。ほとんど共通していたのが“関係機関との連携”“保健師”というキーワードでした。医師、看護師は主に医療の分野で、大学教授は教育分野で、NPO法人は主に福祉分野でというようにそれぞれの分野で専門性を発揮して活躍しています。保健師はその名の通り主に予

防を重点とした主に保健分野で専門性を発揮していますが、住民の生活に近ければ近いほどより多くの知識と技術、実践力が要求され、各分野の専門性を活かすためのコーディネート能力は大切な機能の一つです。子どもへの支援は保護者の理解が得られなければ展開することができません。支援の途中で家族の深刻な問題が浮かび上がってくることもあり、関係機関との連携なくしては支援することが困難なケースも増えています。どの機関がどのように関わり、どのような働きかけをしているのか分からず、支援を受ける側も複数の支援者とやり取りしなくてはならず混乱することもあります。そのためには関係者がチームとなって共通の認識のもと統一した対応をすることが大切であるということから“関係機関との連携”であり、どの分野にも、地域にも入っていける保健師という立場はとても大切であると実感しました。

この学会では“ペアレント・トレーニング”も挙げられており、専門職だけが支援を実施するだけではなく親や周囲の人をいかに巻き込むかが取り上げられていました。子どもへの支援は同時に保護者支援でもあります。周囲の気づきも大切な助言や支援のきっかけとなります。医療や福祉制度の活用は積極的でも、保健となると今後の事態の予測はできても「今は」困っていないし障害も起きていないため、保護者の理解は得にくく専門職と保護者の間に温度差が出てしまいます。保護者にどう理解してもらおうか、気付きを促すかということは支援の出発点となります。今学会で今後活動する上でたくさんの示唆が得られました。このような機会を与えて下さった小児保健協会の皆様へ深く感謝いたします。ありがとうございました。

学会参加報告

第57回日本小児保健学会に参加して

沖縄県福祉保健部 国保・健康増進課
主任技師 比 嘉 千賀子

第57回日本小児保健学会は「子ども達の未来を信じよう、そして、子ども達が夢を持てる社会に」をメインテーマに、平成22年9月16日(木)～18日(土)までの期間、新潟市の朱鷺メッセで開催されました。

303の一般演題と特別講演(4)、教育講演(6)、シンポジウム(6；市民公開講座を含む)、ランチョンセミナー(6)、コーヒープレイクセミナー(1)という状況でした。(講演集より)

学会では現在の小児保健のトレンドがわかるので、注目されている分野での歯科保健の取り組みなどに期待して参加しました。

拝聴したシンポジウムやランチョンセミナーなどから、今は子どもを育てていくのが難しい時代なのだあと改めて感じさせられました。その難しい時代に楽しく育児をしていけるよう母子が孤立しないよう地域での受け皿作り、親をエンパワーするためのプログラムの実施や、また、父親母親が子育てのネットワークを作ったりなど、多方面からの動きが活発化していることが伺えました。

歯科保健については、第1日目に「未来に活かそう学校健診」と題したシンポジウムで、12歳児(中学1年生)のむし歯の状況説明に、新潟県は全国トップでひとり平均のむし歯数が1本を切った状態で

あること、反面、沖縄県はダントツの最下位で3本近くのむし歯であることが報告されていたといます。歯科保健担当者としては文部科学省から都道府県別状況が公表されて以来、一貫して最下位である状況は把握しています。また、事ある毎にマスコミ等への情報提供をしていたので、県内の小児保健の関係者にも周知がなされていると思っていましたが、同行した県内関係者からは驚きの声があがっていたことで、小児保健にかかわる職種が一堂に会する場での情報提供の必要性を強く感じました。

小保主催の夕食会で長年、宮古・八重山地区での乳幼児一斉健診に協力いただいた平山先生と日暮先生にお会いし、言葉を交わすことができ感慨深かったです。初任地が八重山保健所で、赴任早々、一斉健診での歯科健診を担当し、高名な先生方と間近に接し指導を受けた当時のことが懐かしく思い出されました。また、市町村母子担当保健師とも親しく話すことができたことも今後の業務に大いに参考になると感じています。

学会自体の内容については少々物足りない感がありましたが、新潟での交流は、今後の小児保健協会での活動への励みになりました。派遣の労を執っていただいた事務局の皆様、ありがとうございます。